

## 5. 稽古照今・寄稿:童謡爺さんのどうよう語り

作詞作曲家 高橋育郎

### (第一話)

童謡爺さんなんて、あまり聞きつけないよね。

歌というと、どうしても歌のお姉さんとかお兄さんになるね。若さ溢れた元気いっぱいイメージだよ。どっちもNHKだけ。そうそう、そういえば、昭和26年ころ歌のおばさんというのがあったな。松田トシと安西愛子のお二人が、「こどもの歌」をうたって、おおいに活躍していた。この時、童謡という言葉をやめて「こどもの歌」としたのだ。童謡に改革の風を吹かせたというところか。それはともかく、二人はそのとき、まだ若かったから、おばさんと呼ばれるのは抵抗があったんだ。ところがディレクターにおばさんになるまで続けてもらいたい番組にするからと言われて、まあ納得したというわけだ。そのおばさんが終わったあとは、お姉さんやお兄さんに引き継がれ、いまに及んでいるわけだよ。

わたしは今年(2007)72歳になった。いつのまにかなくなってしまったといった方が当たっている気がするよ。いずれにしても72歳といえば、爺じと呼んで歳に不足はなかろう。いや、不足ないどころか立派な爺じだ。いくら長寿時代になったといってもね。ただ日野原重明先生にいわせれば、まだまだ若いといわれてしまいそうだけど。

でも、いわれる前にわたしも若いつもりだ。それで、実のところ好きな歌をうたって、歌の会などやっているというわけだ。勿論、歳の事などそんなに気にしているわけではない。(そりゃ、少しは気にしていますよ)

さて、これから童謡語りを始めるにあたって、自己紹介から始めるのが妥当だろう。

できるだけ手短かにいきたい。まずは今の状況から。最初は平成4年に始めた「心のふるさとを歌う会」で、会場は中央区八丁堀の都勤労福祉会館。平成8年4月から人形町の日本橋社会教育会館へ移る。ここは人形町にある日本橋小学校と併設になっているんだ。



そして平成5年に西新橋で「円塾倶楽部」ができて「童謡・唱歌の会」を始めた。3年間やった。

次は、朝霞市の滝の根保育園で平成13年に始めた「めだかの学校・歌の会」。3番目は、荒川区町屋の「ぬりえ美術館」で平成14年に始めた「ぬりえ童謡の会」。そして4番目が、JTBカルチャー・サロンの講座「愛唱歌をうたおう」ということで、四つの会がでそろったわけだ。

かっこよく言わせて貰えば、みんな大事な宝物というところかな。本当に。

わたしが童謡に取りつかれたというか、そもそもの結びつきのルーツを、探求してみたい。なんて、大袈裟にはいるが、簡単にいえば、生まれつき歌が好きだったということに過ぎない。

物心ついた3歳のとき、隣のおばさんが歌好きで、子供がいなかったせいもあったろうか、めっぼうわたしをかわいがってくれた。よく外出するおばさんだったが、家にいるときはわたしを呼んでくれて、童謡を教えてくれたり、絵本を読んでくれた。憶えた歌を羅列してみると「雀の学校」「アメフリ」「ハイタイサン」「靴が鳴る」だった。だからこの歌を歌うと、そのあたりの情景が、ほんわかと思い出されてしまうのだ。(小学校の音楽の先生だったと後で知った)

思い出の中で、歌の記憶は特に強いものがあるね。メロディーというのは歌詞以上に憶えているものだ。何故だろうか。最近では脳の研究が一段とすすんできているから、この辺の仕組みは解明されると思うのだが。

それから、わが家は、また引越しをした。4歳のとき、すでに3度目になった。この3度目も京浜東北線の赤羽駅近くだったのだ。ここでは国民学校(小学校)の3年生までいたから、爺の第一のふるさととっていいだろう。懐かしい思い出が充満している。ここでは、母から童謡を教えられた。憶えた歌を羅列してみると「雨降りお月」「赤い靴」「青い目の人形」「夕焼け小焼け」「お山の大将」「シャボン玉」「どんぐりころころ」「黄金虫」「からくり」「でんでん虫」「証城寺の狸ばやし」「桃太郎」「金太郎」だった。そして「一寸法師」は父からだった。まさにわたしの心のふるさとの歌といえるね。中で「どんぐりころころ」は、常会(町内会)で独唱したから特別な気持ちで記憶している。

- ※ このお話は2007年(平成19年)に書きました。
- ※ 安西愛子 平成7年に安西愛子主宰の「良歌保存会」の会員になる。新宿安田生命ホール 駒場エミナースに出演した。8年、先生が病気になられ、会は解散した。2018年に百歳で亡くなられた。
- ※ 日野原重明 平成29年7月 105歳にて死去。(童謡歌手で元 NHK 歌のおねえさん稲村なおこの後援会会長)
- ※ 都心では人口減少がみられるようになってきた。小学校に空きが出てきた。そこを区の教育委員会が活用して人形町に日本橋社会教育会館を造り、生涯学習の場に充てた。平成4年に爺は「心のふるさとを歌う会」を始めた。人形町に移ったのは8年5月から。それから10数年して高層マンションが増えてきて、人口は再び増加し学校の教室は満杯状態になってきた。そこで会場は平成29年に地下室の空き部屋へ移った。ここ日本橋小学校は、元西郷隆盛の屋敷跡である。
- ※ 2011年に読売カルチャー教室から講師の依頼があったが、現行以上に増やせないところから、童謡協会の方に代わってもらった。
- ※ 今年2020年は、童謡が誕生して102年に当る。

**「童謡100年」記念コンサート**  
**日独こどもの歌交歓会**

ドワ・カールスルーエ独日合唱団  
「ザ・アップル・ツル」  
札幌市立東区立南小学校(札幌市東区)  
中野昭子(ソプラノ)・藤原(オーボエ)  
「童謡の女王」・日本橋音頭ほか

活動写真家土井博一さんと  
児童舞子の活躍舞台による  
舞踊劇上演

日本橋女声合唱団  
「まてふふるさと」ほか

大西ようこ(チルメン)  
菅野良子(マリンバ)  
「おひらけ」ほか

心のふるさとを歌う会  
「朝顔」ほか

主催  
心のふるさとを歌う会  
高橋有希 03(0)7252-3304  
t-kuo@sirus.ome.jp

2018年8月27日(月)  
開場 13:00 開演 13:30  
日本橋社会教育会館  
5階ホール  
(東京の市立小学校5校より)

入場料 1000円  
小学生 500円  
未就学児 無料

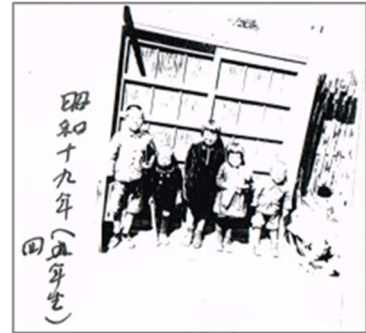
後援 日本童謡協会 童謡100年プロジェクト 生涯現役推進協議会 山岡教育研究会

## (第二話)

童謡爺さんなんて、勝手なことをいっているが、変な男が出てきたものだ。一体、何者なんだと、思われた向きが多いのじゃなかろうか。何事も順序というものがあって、やはり自己紹介から始めんと、いかんね。

そこで遅ればせながら、自己紹介をさせていただこう。

昭和10年の早生まれ、だから昭和一ケタの最後の年代で、小学校は国民学校に変わっていた。爺は小学校を卒業していない。(聞く人はいったんは驚く)純粹の国民学校生だ。いうなれば戦争の落し子であって、極めて希少価値のある存在だと思っている。そんなわけで、かつて「実録小説 ああ国民学校」を著し、世に出した。



音楽は「唱歌」が「音楽」に変わったものの、全くと言っていいほど、内容は相変わらず唱歌であって、楽典などは教えてもらえなかった。だから爺さんたちの年代は、音楽コンプレックス世代と呼ばれているのだ。音楽は苦手意識があって、つい敬遠してしまう。でも、爺は歌うのは好きだからカラオケが始まった時は喜んで飛びついたものだ。爺だけじゃない。大方の中高年者がカラオケ好きだった。

さて、音楽好きだったから高校生になって、合唱団に入り、楽典を知った。それから就職した国鉄でも合唱団に入って、実体験を踏まえながら知識を身に付けたというわけなんだ。そして歌唱はもとより、指揮法、作詞作曲法の本を読んで身につけて行った。

国鉄現職中に、作品がレコード化されたり、団体旅行のお客さんの前で、歌のサービスをしたり、国鉄職員らしからぬ体験をしたのがもとで、退職後の第2の人生は、国鉄の引かれたレールから飛び出して、音楽の方へ乗り換えてしまったんだ。まさに冒険への道だね。



そこで先輩に誘われて音楽イベントの仕事をやったのが始まりだった。でも、そこは順調とばかりはいかない。紆余曲折、試行錯誤があったなかで、幸運なる偶然に出会えて、歌の道に入れることが出来たんだ。

苦勞?の末に掴んだ幸運か。忘れもしない平成4年12月「心のふるさとを歌う会」を旗揚げすることが出来た。そこにはライフ・ベンチャー・クラブ(生涯現役の会)や日本レクリエーション協会で生活余暇開発士の資格を取られた方の絶大な支援があった。自分ひとりの力じゃ絶対できっこな



い。人様のお陰は常に付いて回る。感謝、感謝。爺は人脈は金脈と心得ておるのじゃ。

そしてほぼ同時に憧れの日本童謡協会に入会できた。協会には一流の作詩家、作曲家がおられる。いくなればプロ集団だね。爺はいろんな歌が好きだけど、やはり童謡は自分に一番向いているなと思っているんだ。

今年(編者注:2007年)は、この会も15周年だ。ひとつ種が蒔かれ、芽が出ると、それが幹になり枝葉が広がるもので、5、6年前に、朝霞市保育園、町屋のぬりえ美術館で、それぞれ童謡の会が発足し、更には昨年10月、JTBのカルチャー・サロンで「愛唱歌」の講座を始めるに至った。

そういえば、朝霞市の前に、西新橋で始まったカルチャー教室「円熟倶楽部」の講師に推されたのが最初だった。3年間の経験だった。

童謡作品も幾つつか作り、童謡祭で歌われ、自己実現に邁進中というところだね。では。

花よ ジャスミン 斉藤信夫作詞 page  
高橋いくを作曲

♩=100

か お り る か お り る あ さ の ま と  
か お り る か お り る ま る の ま と

ま る で ほ な か こ ほ ち か ら の び て  
ほ な ほ ほ し か た か ら す と こ し た

お き て お き て と ほ ほ え み か け る  
ね て よ ね て よ と さ さ や き か け る

う す い ピンク の ほ な は ジャ ス ミ  
あ ま い ピンク の ほ な は ジャ ス ミ

花よ ジャスミン  
かある 朝の窓  
から花の  
鉢から 伸びて  
起きて 起きてと  
ほほえみかける  
うすいピンクの  
花よ ジャスミン  
かある 朝の窓  
花は 星かた  
からす戸越しに  
寝てよ 寝てよと  
ささやきかける  
あまいピンクの  
花よ ジャスミン

花よ ジャスミン  
斉藤信夫作詞  
高橋いくを作曲

(つづく)

- \* 2001年の童謡祭で歌われた「大きな木はいいな」(作曲・白川雅樹。うた大和田りつ子)は、翌年の全国サミット(豊川市)で、21世紀の愛唱歌になって、カワイの「みんなの童謡」曲集に載り、2010年「全国童謡歌唱コンクール」で、大人の部の金賞を受賞した。歌唱は豊田市の宮内真理。
- \* 国鉄在職中の昭和 43~55 年の間は、東京~千葉間線路増設工事に伴う駅舎改良に関わり、多忙を極め、歌えるゆとりが全く無かった。ただし 56 年には、この仕事から解放され、団体旅行のお手伝いをした。そこで団体旅行音頭やお座敷電車の歌など 4 曲のレコードを出した。
- 国鉄を退職して、音楽イベントの仕事に就き、そこでめぐり合ったのがライブ・ベンチャー・クラブ(人生冒険)の生涯現役であった。
- \* 「ぬりえ美術館」は、山岡鉄舟研究会の山本紀久雄会長の紹介で始まったもので、10 年間にわたった。

## 5. 稽古照今・寄稿:童謡爺さんのどうよう語り(第三話・第四話)

作詞・作曲家 高橋育郎

## (第三話)

人間、年齢をとると、昔のことが無性に懐かしくなるものだ。父母のこと、祖母のこと、それから幼な友だちと、思い出していくにつれて胸が熱くなるね。



ところで、爺は耕太という分身を主人公にして、いろいろと思い出を実録風に書いているのだが、このほど、また一冊の本に纏めた。「たのし」の7月号で、あり

がたいことに紹介してもらったのである。内容は昭和初期、10年代から20年代半ば頃までの子供の遊びを主体に実体験に沿って書いた。

とにかく、あの頃の子供はよく遊んだものだ。車社会なんて、まだほど遠い時代だったから、子供はどこでも羽をのばして、のびのびと駆け回って遊んだものだ。

そして、大人もまた「子供は風の子」といって、子供の遊ぶのを目を細めて見ていた。そんな雰囲気もまた子供が無心に遊べる支えになっていたように思う。

いま思うと、当時の子供は、日本の風土の中で培われた伝統の遊び「わらべうた」を、かなり忠実に再現していたと思う。だから、そういう意味で、爺はそれらの体験した遊びを細大漏らさず書こうと意気込んだ。でも、その点は、書いてしまってから、あれもこれもと書き落としてしまったものがあつたね。しょうがないなあ。

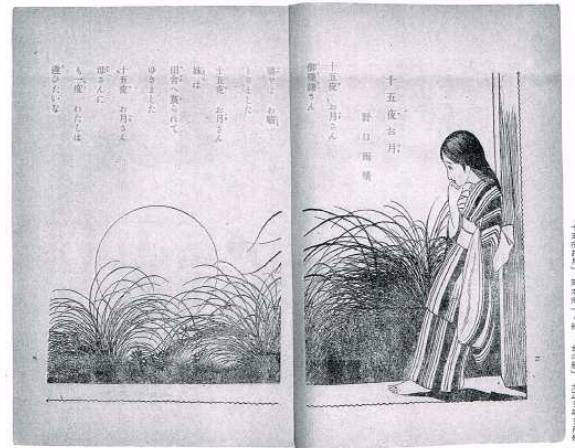
しかし、それより何より、日本の子供の遊びは素晴らしいと気づいたね。童謡もそうだが、世界に誇る日本の文化だと、叫びたくなるような気持ちになった。

そこで、こんどはそのことを書いてみたいと思うようになった。たとえば、代表的な「鬼ごっこ」や「鬼さんこちら」(目隠し遊び)「うしろの正面だあれ」では、鬼が子供の相手役で出てくるね、鬼が子供の遊び相手で、あの怖いはずの鬼との対比が面白い。鬼とは一体何者か、考えてしまう。

お伽話に出てくる鬼はどうか。「桃太郎」の鬼は、逃げ回って、やっつけられて、宝物まで差し出してしまった、なんともあつけにとられるほどの従順さだ。「こぶとり爺さん」などは、朝がくるまで歌って踊って、無邪気そのもの。ところが鶏の声を聞いて、慌てふためいて逃げてしまう陽気で臆病者だ。「一寸法師」の鬼も一見強そうだが、小さいからだの男の子に飛込まれて、やっぱり慌てふためいて逃げてしまう。どれもこれもお人よしの愛嬌者が多い。このように一見強そうで、意外ともろいのだ。こうした鬼の存在、人間との関わりはどう読みといたらいいのか。興味のある問題

だと思う。

そして、こうしたお伽話は、明治、大正にかけて、ほとんどが唱歌や童謡になって、子供は歌ったり踊ったり、遊びの対象にして、お話が歌とも結びついたから、一層親しみを増して行ったのだ。こうしたお話や歌は、いわゆる文語体を離れて、言文一致の口語体に結び付いて生まれた。



更に、子供の遊びと歌の関わりをみると、大きなウエイトを占めるのは、何といってもわらべうただ。いいかえれば子供たちはわらべうたを歌って、それに合わせて遊んだのだ。わらべうたの話は、次号にまわしたい。

\*「子供は風の子」は、いまでは死語になってしまった。昔の遊びを今の子供にですね。

(つづく)

#### (第四話)

童謡の読みかたは、時代により変わってきたという話をしよう。

言葉は時代によって変わるものだね。童謡も然りだ。童謡という文字が使われたのは、古く7世紀なかばで、蘇我入鹿事変を予言した「岩の上に小猿米焼く米だにも たげてとほらせ山羊の翁」(かもしかよ せめて小猿の焼き米でも食べてゆけ)というのが文献にあって、このとき童謡は(わざうた)とよんでいた。わざと作ってはやらせたから。神わざの歌だから。つまり予言の歌だからという説があるが、面白いのは、子供を仲立ちにするという意味があって、子供は純真で神秘性があり、真似事が好きで、知った事を素直に伝えていく性質があるから、伝播の役割、つまり通信手段として活用したということだ。まったく驚いてしまう話だね。

そのルーツはやはり中国から渡来したもので、中国では治世がいいときは、麒麟や鳳凰が現れたり、逆に天下が乱れると太陽に異変が起きたりすると、童謡がさかんに歌われると信じられていたそうだ。童謡がいまとは違った意味で、何だか不吉な感じのする言葉だったね。そういったことで、童謡は流行歌的な存在だったのだね。「岩の上」が流行ったときに、蘇我入鹿事件が起きたから、この歌が予言したといわれた。ほかに風刺の意味もあったんだ。しかし平安時代になってから、催馬楽(さいばら)や風俗歌(ふぞくうた)に移り変わっていったんだ。

一方、童謡は子供が歌うという意味合いが強くなり、平安中期ころから今様(いまよう)が盛んになってきたとき、後白河法皇が「梁塵秘抄」という今様の選集を出したのだが、この中で子供も歌える歌を、童謡とよんでいるんだね。でも、もちろん大正になって生まれた童謡とは意味合いが違っているよ。



江戸時代になって、童謡は子供の遊び歌となって、定着し(わらべうた)と呼ばれるようになってきた。わらべうたは今も本筋では変わらず、ずっと歌い継がれてきているのだ。

さて、童謡はようやく大正になって、本来の子供の歌「どうよう」として独立したジャンルで登場したのだ。すなわち大正7年7月のことだ。



仲よし小道  
作詞 三苦やすし  
作曲 河村光陽

このとき以来、童謡は「どうよう」となって、今日にいたっている。1918年のことだからまだ90年くらいきりたっていない。童謡が、どうようとなってから、それほど時間はたっていないのだね。

ところで大正7年7月というのは何が起きたのか。実はこのとき童謡の生みの親、小説家である鈴木三重吉が童話と童謡の雑誌「赤い鳥」を発刊したのだ。これが童謡の始めとなった。

三重吉は夏目漱石の門下生で、「桑の実」や「千鳥」といった小説で知られた存在だった。長女が誕生した時、我が子に良いお話や歌を与えたいものだと見回したが、どうも心を潤す、芸術性豊かな薫り高い作品はないということに気づいたんだね。そこで、ならば自分でそういうものを生み出したらいいだろうと、一念発起して、自分に共感してくれる作家に呼びかけ、そこに集まった優秀な人材の力を得て「赤い鳥」を編集発行したのだ。三重吉の呼びかけには、ほんとうに素晴らしい人材が集まったものだと感心してしまうのだが、おかげで童謡運動に火がついて、見事な成果をあげていくのだ。



言葉は時代によって変わっていくといわれているが、童謡も然りで、(わらべうた)から始まって(わらべうた)となり、最後に(どうよう)となったんだね。

- \*鈴木三重吉 明治15年(1882)広島市出身 東京大学卒
- \*昭和初期 改造社が「日本文学全集」を発刊し、中に鈴木三重吉もある。
- \*平成30年(2018)の7月1日が童謡誕生100年になる。

(つづく)

## 5. 稽古照今・寄稿:童謡爺さんのどうよう語り(第五話・第六話) 作詞・作曲家 高橋育郎

### (第五話)

前回では、童謡が生まれたのには、やはりそれなりの下地ができていたという話をしたね。いきなり降って沸いたようにできたわけじゃないということなんだ。



時代背景とでもいうことだね。大正のあの時代は、大正デモクラシーが生み出した大正ロマンと呼ばれた時代だ。第一次世界大戦が終わって、誰もが自由と文化を望んだのだね。

それにしても三重吉は、童謡というジャンルを確立させたのだからすごい。童謡は世界に誇る日本の文化といわれ始めるまでに高めたわけだ。

日本の童謡のような歌のジャンルは、世界に例がないとまでいわれている。勿論、子供向けの歌があるにはあるが。

つまり大人が子供のことを思って、子供のための歌を作ったという意味でいっているので、イギリスでは「マザー・グース」というのがある。白秋が「まざあ・ぐうす」として翻訳し、紹介しているんだが、あれは日本でいう「わらべうた」なんだ。だから日本の童謡とはおもむきがちがうんだ。

どうだろう。いまの子供たちは、そういった文化の恩恵を、恩恵として喜んで受け止めているだろうか。はなはだ疑問だね。

もし、すなおに受け入れられ歌われていたら、世の中、こんなにまで殺伐とはしていないのじゃないかと思われてならないし、せつかくの文化資産を粗末にしているようで、もったいない話だと思うんだ。ここは大事な話だとも思う。勿論爺さんのような考えの人は大勢いる。ただ、時代のせいだといってしまえばそれまでだけど、大正ロマンの気風はもう少しとりもどしたいものだね。そりゃあ、あの頃とはだいぶ時代背景が違うからね。時代の趨勢というか流れには、なかなか抗しがたいものがあると思う。だからあの時代に帰れなんていうのは無理があろう。

それにしても近頃は、ますます安易になってきているようだね。批判がましくなってしまうが、とにかく面白くてとっつきやすいものにとびついてしまう。面白おかしければいいんだといった軽佻浮薄な風潮がみられてしょうがないんだ。芸術だの文化だの、そんなものはどうでもいいや、そういった類いの風潮だ。



こうした傾向、社会的風潮はどんなものかな。憂慮すべき問題だと思うのだが。いうまでもなく芸術は、人間性を豊にして高めてくれるものだ。

芸術は美の追求なんだ。美しいはいまどき、流行らない言葉だけど、美とはバランスなんだね。絵画然り、音楽もそうだ。バランスが崩れているところに美はないんだ。美の文字自体左右対称だ。仏教が真実を教えている。「かたよらないところ」とね。心身の健康もこのバランスからくる。病気はバランスの崩れが引き起こすのだ。

芸術性が失われてくると心はすさび、砂漠化してしまう。砂漠の中では生きられない。潤いがなければ人間も動物だって生きられはしない。そんなことは分かりきっていると思う。でも面倒くさがって、遠ざけている。その結果が残念ながら、見ての通りの現状だ。このままでいいのかと爺さんは思う。

「心に潤いと緑を」と、こう叫ばずにはいられない。オアシスがほしいのだ。健全な心身から、健全な社会は生まれる。そう思えてならないのだ。

童謡は心のオアシスになるのではないか。こう信じて、真の童謡活動を継続していかなばならない。童謡爺さんはそう思っているんだ。

近年は情操教育というのがなおざりにされているね。いま、教育再生の議論のなかでも、あまりとりあげられていないね。徳育もそうだ。徳育や情操教育は、人間形成の基本だと思う。もっと真剣に議論すべきだと思う。



こんなことっていると何だか昂揚してきちゃうね。では、次号では、わらべうたや大正の芸術童謡の中味をみていこう。

- ※ 2014年 文科省は「道徳教育」の強化の実施に踏み切ることを提唱した。
- ※ 2016年から「生涯健康脳と音楽」のテーマで講演するようになった。右脳は音楽脳と呼ばれ、右脳と左脳のバランスを保つことの大切さを訴えるものだ。
- ※ 「わらべうた」は作詞作曲者不明の、いわば読み人知らずだ。この歌は、俺が作ったんだと、著作権を主張するものはいなかったんだね。

## (第六話)

三重吉から「赤い鳥」の主筆を委嘱された白秋は、童謡詩の創作に並々ならぬ意欲を示して、取組んだのだ。その気持は分かる気がするね。そりゃあ、とにかく童謡という草分けの仕事が舞い込んで来たのだから、張り切らざるをえんと思うよ。

白秋が創作に当たって、まっ先に念頭に浮んだのは、伝統童謡であるわらべうただったんだ。わらべうたこそ最良のお手本だったんだね。

わらべうたは子守唄も合わせて、子供の心情がよく表れているんだ。子供は正直というが、理性より感情が勝っていて、善悪の判断が単刀直入なんだね。

生き物も簡単に殺してしまう。弱い者いじめもやってしまう。純粹無垢ながら、そんな一面も持ち合わせているんだ。感覚が鋭くて生きいきしている。「子供に帰れ」とか「子供は大人の鏡だ」なんていうこともいっている。白秋は子供の特性をよく掴んだ。やさしさと残酷さ、向う見ずかと思うと怖がりや、そういったちょっと矛盾した複雑さが入り組んでいて、うまくコントロールできないもどかしさ。そうした子供の心情を真正面から見つめたんだ。唱歌には見られなかったのだ。

唱歌では、花鳥風月が歌われ、忠君愛国など修身教育といった教育勅語を基盤とした教訓的な歌が重んじられたんだね。三重吉はそこを衝いたんだ。ちっとも情緒がないじゃないかとね。そして選者として「赤い鳥」をまかされた白秋は、そのあたりをよく心得ていた。そして、よくもまあといったくなるほど、たくさん作った。

いっぽう八十も負けず劣らずつくったね。やっぱり感心するほどの多作家だ。

ところで彼には童謡界のエポックになる作品がある。「赤い鳥」にデビューしたときに作った「かなりや」だ。「唄を忘れたかなりやは」誰でも知っている有名な歌だね。

この詞が発表されたのは大正7年の11月だった。

実は、三重吉は、はなから童謡に曲をつけて歌わせるなんてことは考えていなかったんだね。音楽はよく知らなかったから関心もなかったわけだ。標準的な日本人だったんだよ。でも、歌にして歌わせてみたいという気持が全く無かった訳でもなかったようだ。そこで、曲を付けるのであれば、当代一の山田耕筰がよいと思った。ところが、耕筰は外遊の予定があった。そこで、教え子の成田為三に作らせたのだ。



平成10年 東京・豊島区立小学校

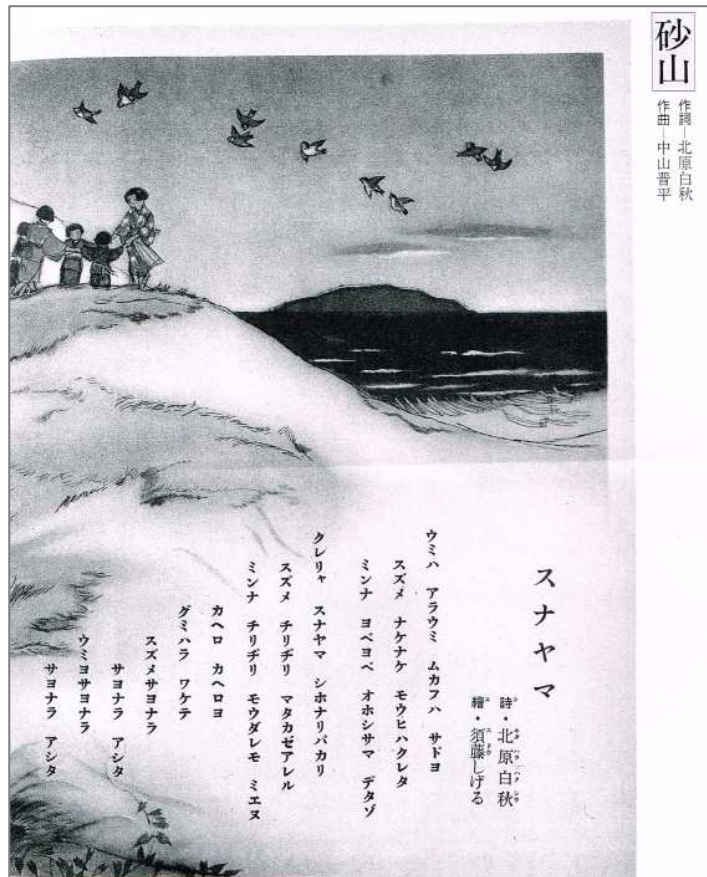
為三は、できあがった曲を小学生に歌わせようと、ある小学校を訪ね憶えさせて、三重吉を招いて発表会を開いた。彼は小学生の歌が始まると、目をこらし一心に聞き入ったんだね。ところが子供たちが、嬉々として一生懸命歌う歌声に、感動のあまり大粒の涙を流したというんだ。ほんとうに感動したことが伝わるシーンだね。

それから三重吉は、童謡は曲が付いて歌われるのがいいんだと、すっかり考えをかえたんだ。

でも、白秋はまだそういう気持にはなり切っていなかった。詞はリズムよくイントネーションを交えて読み上げることこそ生きるんだと主張していたんだ。実は「赤い鳥小鳥」に為三が曲を付けたんだが、簡単すぎたせいか「かなりや」ほどの感動はなかったんだね。

しかし、ここに山田耕筰が帰国し「赤い鳥」に着目してから、白秋に変化が見られるようになってきたんだ。

大正8年に「あわて床屋」を作曲した。ユーモラスなところが受けたが、白秋も気に入ったんだ。それから「この道」が大いに歌われ、それからというもの二人は名コンビになって「砂山」や「ペチカ」など多くの名曲を生み出していたんだ。白秋もついに曲の素晴らしさに気づき、童謡は歌が付いて生きてくると、すっかり意気投合した。やっぱりね。



- \* 西条八十は、資産家の家に生まれ育った。父親は石鹼工場を営んでいた。しかし、長男が放蕩して、財産を失い貧乏のどん底に落ちた。そこから八十の苦労が始まった。そうした環境の中で「かなりや」の詩は生まれた。八十は、いつとき歌を忘れていたのだ。この詩は、三重吉から「赤い鳥」の選者にどうか声をかけられ、再スタートの希望の灯が見えたときに作ったものだった。
- \* 白秋が「砂山」を作詩したころは、人気が高まって、あちこち講演を頼まれた。この歌は新潟市の小学校に呼ばれた時で、講演が終わったところで、生徒に取り囲まれ、みんなで、近くの寄居浜へ出かけ、生徒に歌を頼まれて作ったものだった。翁は、高校のとき2年ほど新潟市で過ごし、寄居浜の思い出を歌にしたよ。

(つづく)



## 5. 稽古照今・寄稿:童謡爺さんのどうよう語り(第七話・第八話) 作詞・作曲家 高橋育郎

### (第七話)

「赤い鳥」の社会に及ぼした影響はすごいものだったんだ。生みの親の鈴木三重吉も、ここまでとは予想しなかったろうね。今流にいうと、まさに想定外だったわけだ。なかでも最も刺激を受けて、よし、それでは俺も、と立ち上がったのが野口雨情だった。

「赤い鳥」が出た翌年に「金の船」という童謡月刊誌が出て、ここに詩を寄せた。そして、その翌年、藤森秀夫が「童話」という雑誌を出し、さらに「コドモノクニ」というのが出たんだが、雨情はこれらにも寄稿した。これから以降、言い方はよくないが、雨後のたけのこの如くに全国津々浦々に、童謡は同人誌などのかたちで広まって行った。特に、中産階級にもてはやされたのだった。そうしたところからみても、「赤い鳥」は童謡運動の魁と、三重吉が自ら言ったことが当たったんだね。

「赤い鳥」は、童謡詩の投稿誌なんだ。白秋と八十は作ることの一方で選者になった。そこには熱心な応募者が多く、選者はうれしい悲鳴を上げた。中でも特に熱心で、傑出したのが、与田準一、巽 聖歌、佐藤義美の三人だった。三人は白秋の弟子とも言われるようになったんだ。また、平成になって、にわかに脚光を浴びてきた金子みすずは、西条八十がその才能を見出したのだ。ところで、不思議といおうか面白いのは、三重吉自身は童謡は作っていないということだ。昭和になって活躍をはじめたサトウ・ハチロー(日本童謡協会の創始者)は白秋の心酔者で、多くを学んだという。

大正のこの時代は、第一次世界大戦が終わって、自由主義思想が世界的に広がり、日本も例外ではなかった。というより世界に先駆け積極的に摂取して、文化に反映させて行ったんだね。日本人の勤勉さ、優秀さが発露されていると思うのだが、文学や芸術活動が顕著になって、この時代を人は大正ロマンと呼んだ。すばらしい精神文化の誕生であり、爛熟ぶりを見せたんだね。その象徴が竹久夢二であり、彼がつむぎ出した童画を含む絵画や、詩、さまざまなデザインは魅惑的であり、多くのファンを持って、いまなお輝きを放っている。「宵待草」はよく知られた代表だね。文学では志賀直哉、武者小路実篤、有島武郎などが中心で立ち上げた白樺派が、明治の風潮を一新した。

演劇も、川上音二郎の流れを受けて、島村抱月が松井須磨子と組んで、芸術座による新劇運動を開始した。ここでは演目に「復活」が上演されて、ロングランしたが、主題歌である劇中歌「カチューシャの唄」がよく歌われた。作曲は中山晋平だ。実に画期的で、流行小唄のレーベルが貼られて流行歌第1号のレコードになったんだ。その



後の流行歌のはしりだね。一方で、作曲で登場した中山晋平が、そのあと野口雨情らと組んで多くの名作童謡を生み出すんだ。後に大正期のもは大正童謡、あるいは芸術童謡と呼んでいるんだ。このあたりの活力は何とも目を見張るものがある、実に魅力的な時代だったね。いくら語っても語り尽くせない思いがするんだ。

そうした時代背景から「赤い鳥」は生まれたんだ。ここで思うことは新しいものが生まれるには、いきなり突拍子もなく生まれるということは、まずはなくて、時代の環境といった下地が胎盤になって、生まれるんだね。童謡誕生にも、そういった意味の環境が気運を高めていったんだね。

遡ってみると、明治になるが、17年に「言文一致論」というのを物集高見(もずめたかみ)という国文学者が唱導した。これに同調者が現れ、25年になって「小学唱歌」のなかに言文一致で作られたものが出てきたのだ。言文一致とは、要するに文語体で書かれていたものを、やさしい日常用語で書こうというもので、文語体に対して口語体と呼ぶものなのだ。ここに登場した作曲家が田村寅蔵であり、納所弁次郎だった。二人は主に巖谷小波、石原和三郎と組んで「ももたろう」「きんたろう」「はなさかじい」「うさぎとかめ」「一寸法師」など今でも歌われているんだが、子供がすぐに歌える、いわばお伽話唱歌を作ったんだ。その後、34年になって、瀧廉太郎が登場した。でも23歳という早世が惜しまれてならない。「荒城の月」は代表作だね。東くめというまだはじまって間もない幼稚園の保母さんの詞と組んで、園児の歌える幼年唱歌を作ったんだ。「早く来いこいお正月」が知られているね。(つづく)

- ※ 第一次世界大戦 1914(大3)～1918(大7)オーストリア皇太子が、ボスニアにてセルビアの青年に暗殺された。これがきっかけになった。  
ドイツがヨーロッパを巻き込み、世界に波及。日本はイギリスに荷担してチンタオで、ドイツと戦い勝利した。ドイツの捕虜を日本の収容所にかくまった。収容所ではオーケストラなどドイツの音楽や、その他文化を学んだ。(習志野市の場合)  
一方、四国坂東の収容所では、ベートーヴェンの第九が歌われ、後世に伝わり有名になった。
- ※ 大正ロマンの象徴的な事。竹久夢二 平塚らいてふ「青鞥」。志賀直哉などの「白樺派」。宝塚歌劇 東京駅 銀座カフェ・プランタン 芸術座 有楽座 吉野作造 浅草オペラ 交通信号 カルピス 日活女優酒井米子 海水浴が時代の象徴。
- ※ 「金の船」は佐藤佐次郎が編集者。2年ほどで「金の星」と名を変えた。
- ※ 「言文一致」坪内逍遙「小説神髓」(近代文学最初の組織的文学論)二葉亭四迷「浮雲」山田美妙「夏木立」。三遊亭円朝の落語講談。
- ※ 藤森秀夫は「めえめえ子山羊」が知られている。
- ※ 金子みすゞ 下関を終生の住家とした。大正12年に雨情が「金の星」に載せたのが最初。続いて八十が「童話」に「お魚」の詩を載せた。みすゞは八十のファンで喜んだ。そのあと八十はみすゞに下関で逢う。そして、「幻の童謡詩人」みすゞを応援、世に広めた。  
更に、平成になって矢崎節夫(童謡協会会員)が著作によって、広く知らしめた。  
実は「幻の童謡詩人」に大木まどかがいる。詩集「お菓子の塔」があって、爺はいくつか作曲した。その一つが童謡協会の季刊誌に載った。協会に入会できたのは、その実績もあった。藤田圭雄の「童謡詩」に掲載されている。

(第八話)

三重吉という人は不思議な人で、自分では童謡や童話は作らなかつたんだね。ほかの作家に作らせて、自分は集まった原稿を細かくチェックしていたんだ。たとえばびっくりしたんだが、あの芥川龍之介の「蜘蛛の糸」という名作童話があるね。あれなど、実は三重吉が、朱でかなり手を入れているんだね。龍之介といえども三重吉にはさからえなかつたし、たしかに三重吉が手を加えたもののほうが、俄然よくなっていて、頷けるんだ。そういう才能があつたんだね。

話がそれだが、ここでいわんとしたことは、三重吉が「赤い鳥」をおもいだした以前にそうした空気といおうか童謡が現れていたんだ。

明治三十八年には夏目漱石、岩野泡鳴、野口雨情、三十九年に薄田泣菫、巖谷小波、四十年は田山花袋、竹久夢二、四十四年は北原白秋、大正3年、小川未明といった文人が、童話を書いているんだ。それらの作品は「少年」「子供之友」「良友」「少女号」「少女世界」といった雑誌に載せられたんだ。

こういう文人たちは、ほとんどが三重吉の呼びかけに応じているんだね。泉鏡花もいたし、あと忘れてならないのが、三木露風の存在だ。

露風はすでに「廃園」などの詩集で知られ、一方、白秋の「思い出」や「邪宗門」などが高く評価されて、二人は並び称されていたんだ。「白露時代」といわれたほどだ。

それで三重吉はどちらを選者に据えるか迷ったほどだ。手紙を書いて打診してみたり、でも結局は、白秋の方が、多作家であり、反応がよかったんだね。そうした器用さをもって、白秋を選んだのだ。勿論、決して作家としての優劣を決めたわけではないのだがね。

そうした露風はどうしたかという、と、「こども雑誌」と言う雑誌の方へ肩入れをしたんだ。露風といえば、有名なのは「赤蜻蛉」だね。あれは大正10年に「樗の実」という同人誌に発表されたものなんだ。曲は山田耕筰だね。





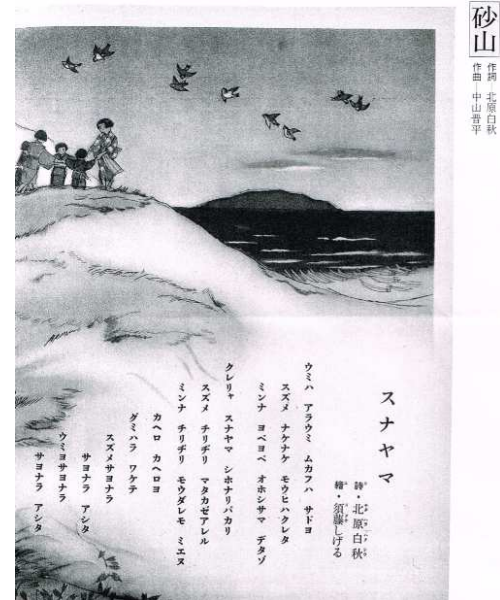


## 5. 稽古照今・寄稿:童謡爺さんのどうよう語り(第九話・第十話) 作詞・作曲家 高橋育郎

### (第九話)

北原白秋が「赤い鳥」によって、童謡運動を始めるとき手本にしたのが、わが国伝統のわらべうたであったことは、まえに話したとおりなんだが、考えてみると爺が子供の頃は、このわらべうたを歌って、遊んでいたんだね。昭和10, 20年代のことだ。とにかく子供の遊びの中心はわらべうただったんだ。

あの頃の子供たちは、天気によければ外へ出て遊んだものだ。まずは4~5人そろって「〇〇するものこの指とまれ」と人差し指を出して呼びかける。すると遊びたい子は寄ってきてその指をつまむように掴む。そして次から次へと集まって来る。こうしてたいていの遊びははじまるんだ。



簡単な遊びは「鬼ごっこ」と「かくれんぼ」だ。「鬼ごっこするもの寄っといで、じゃんけんぽんよ、あいこでしょ」そして「かくれんぼ」のときは、そのあとに「もういいかい、まあだだよ」「もういいかい」「もういいよ」とつぶくんだね。

ところで、いまはお正月といっても、ひっそりと静まりかえり、子供の声も聞こえないし、ましてや空に凧はあがってない。羽根つきの音すら聞こえない。さびしいもんだよ。

というわけでわらべうたは、あの頃でおわってしまったという気がする。

わらべうたは江戸のなかば以降、さかんになってきたんだが、爺さんたちまでは、伝統をしっかり受け継いでいた最後の世代となったんじゃないのかな。そんな風に思えてならないよ。

それで爺さんは、「昭和追憶」(2007年)という本を出したんだが、わらべうたの伝統を絶やしたくないという思いなんだね。

ちなみにどんなわらべうたで遊んだか、主なものを拾ってみると「通りゃんせ」「花いちもんめ」「かごめかごめ」「ひらいたひらいた」「おしくらまんじゅう」「坊さん坊さん」「いもむしごろごろ」「今年のぼたん」「ずいずいずっころばし」「だるまさん」「あんたがたどこさ」などなど。これが爺の育った東京下町の歌だった。そして、わらべうたは全国各地それぞれにあったんだね。



白秋はそうした各地の歌をあつめて本にして、自分の手本にしていたんだね。たとえば「赤い鳥小鳥」などは北海道でうたわれていた「赤い山青い山」っていうのがあって「ねんねの寝たまに 何せよいの あずきもちの とちもちや 赤い山へ持って行けば 赤い鳥がつつつく 青い山へ持って行けば 青い鳥がつつつく 白い山へ持って行けば 白い鳥がつつつくよ」というのがあって、これが元歌になったんだね。でも誤解しないように。白秋はなんでもかんでもわらべうたを元にしたわけではないからね。

さて、ここでわらべうたの歴史をしてみると、江戸の文政(1820)に行智が『童謡古謡』という本格的な研究書を出して、いろいろなわらべうたを童謡という漢字にして、分類整理したんだ。‘子守唄(寝かせ唄、目覚め唄、遊ばせ唄)‘鬼わたし‘盆唄‘鞠唄‘天象 などに分類したんだ。これは画期的だったんだね。

さらに遡ると、平安朝の民謡といわれた風俗唄(ふぞくうた)。続いて流行した今様(いまよう)などを、嘉応元年(1169)後白河法皇が『梁塵秘抄』という本にまとめたんだ。この中に子供も歌える歌があるんだ。よい声で歌えば家の中の梁の塵までもうごくという意味なんだね。中で有名なのは「舞え舞え蝸牛(かたつぶり) 舞わぬものならば、馬の子や牛の子に蹴(く)えさせてん…」というのがある。ではまた。



※ 「夕方のおかあさん」サトウハチロー作詩 あの頃、日暮れになるまで子供たちは遊んでいた。「ごはんだよー」お母さん呼び声で、みんな家に帰って行った。夕空には星が瞬きだす。誰かが「一番星みつけた」という。その声にこたえて、次の誰かが「二いぼんぼしみつけたー」とこたえ、三番星へと伝わっていく。懐かしい夕方の情景だ。

## (第十話)

大正期のいわゆる芸術童謡では、白秋の向こうを張って、もう一方の旗頭は野口雨情だね。二人ともわらべうたを元にしていて、共通点もみられるが、雨情は民謡に根ざして土着性というか、土の匂いがぷんぷんするし、「十五夜お月さん」のようなどこか懐かしさのこもった歌が多いね。その点、白秋のようにあかぬけていなくて、庶民的といえるかもしれないよ。



「野口雨情記念 湯本温泉 童謡館」。0246-44-0500



「十五夜お月さん」といえば、作曲は本居長世だ。江戸時代活躍した本居宣長の子孫だ。雨情と長世の結びつきもすごいもので、童謡の名作をたくさん世に送り出した。この歌のエピソードといえば、長世のピアノ伴奏で、娘のみどりさんが有楽座で独唱会をやったことだ。実は童謡がステージで歌われた最初なんだが、感動が場内に沸きかえって熱狂的拍手だったそう。大正9年11月のことだった。



「雨情の宿 新つた」。0246-43-1111

みどりさんは、日本人形のような美少女だった。恵まれたことに長世には3人の娘がいて、この三姉妹はそろって歌手になって、父について全国童謡行脚して童謡の普及につとめたんだが、その情熱はすごかった。「青い目の人形」などはずいぶん歌われたね。

あと、三木露風を上げなくてはならないね。「赤蜻蛉」があまりにも有名で、ほかに「野薔薇」を思い出すが、白秋にくらべて地味な存在だね。

さて、大正14年7月に「JOAK こちら東京放送局であります」の甲高いアナンスの声で、ラジオの本放送が始まった。その声は、大きなラッパ型のスピーカーから聞こえるんだ。「蓄音機商売はあがったりになるんじゃないか」そんなこともいわれたが、いやいやとんでもない。ラジオを通して聞こえてくる歌に刺激されて、逆にレコードも売れたんだ。相乗効果っていうもんだね。そして、昭和は幕を開けた。

レコードが売れ出すと童謡歌手もつぎつぎ誕生して、レコード会社の専属になっていったね。

コロムビアは本居三姉妹はじめ、大川澄子を起用し、7年佐々木すぐるの「月の沙漠」のヒットを出し、飯田心さ江や高橋祐子が続いた。

ビクターは、八十と晋平が、平井英子とトリオになり「アメフリ」「鞠と殿さま」「肩たたき」「雨降りお月」「証城寺の狸囃子」「シャボン玉」「黄金虫」などぞくぞくと出した。

ポリドールは5年に清水かつらと弘田龍太郎が組んで「雀の学校」や「うれしいひなまつり」。戦後に「花かげ」「からすの赤ちゃん」など出した。

キングは、講談社が昭和11年に始めたんだ。武内俊子と河村光揚が娘さんの順子と組んで「かめの水兵さん」を出して、これはよく歌われたもんだ。

このあたり、爺は生まれていながら、物心がついたころには、これらの歌は全盛期で、前にも書いたとおりよく歌ったもんだよ。もう一つ忘れられないのは「どんぐりころころ」だ。青木存義詞、梁

田貞曲なんだが、爺が昭16、国民学校1年生の時、隣組の常会で、独唱させられた思い出の歌だからだ。梁田は「城ヶ島の雨」が知られているね。

「めえめえ児山羊」は大正童謡で藤森秀夫、本居長世のコンビだが、戦後に川田正子に歌われて、中学の教科書にも載った。ただ、正子さんは、この歌は痛々しくて好きになれなかったと言っていた。本人からじかに聞いた話だ。

大正の名作では、ほかに「雨」「あわて床屋」「靴が鳴る」「叱られて」「浜千鳥」「七つの子」「赤い靴」「からたちの花」「砂山」「背くらべ」「夕焼小焼」「春よ来い」「あの町この町」「この道」「てるてる坊主」「花嫁人形」などだ。では、次回から昭和の童謡へ移ろう。

※ 「雨降りお月さん」元々は「雨降りお月」だったのが、いつのまにか「さん」が付いて歌われている。一番の歌詞は大正14年に「コドモノクニ」で発表した。それが好評により、追って「雲の陰」を加えた。曲は一番と違っている。雨情の最初の奥さんの輿入れの状況をうたったものだ。

※ 戦時体制の町内会は「隣組」といった。「とんとん とんからりと 隣組」の歌がはやった。

※ 川田正子との出会いは、平成二年十一月。埼玉県杉戸町町制施行百年記念で親子のど自慢大会が行われ、ここに川田さんを迎えた。私と二人は審査員になった。川田さんは独唱した。このあと銚子市の教育委員会による「川田正子シヨ」に二人は呼ばれた。「森の木児童合唱団」も出演した。



(つづく)

## 5. 稽古照今・寄稿:童謡爺さんのどうよう語り(第十一話・第十二話) [完]

作詞・作曲家 高橋育郎

### (第十一話)

大正に「赤い鳥」からはじまった童謡運動は、たくさん名作を生み出して昭和に入って行った。昭和はラジオから始まったね。ラジオはレコード界を刺激して、蓄音機業界を発展させて行ったよ。ラッパ型の蓄音機は箱型に替って行った。動力源はゼンマイでグルグルと手で巻いていくあれだ。爺さんの家には昭和28年に買ったものが、今でも押入れの隅にあるよ。

それはともかくとして、昭和2年に日本コロムビア、日本ビクター、日本ポリドールといった外国資本の蓄音機会社が次々誕生していった。そして、今までの童謡とちがった子供に分かりやすいリズムカルな童謡になっていったんだ。だから、大正の芸術童謡に対して、昭和はレコード童謡といわれるようになったね。それでも、はじめのうちは大正期のもの「この道」や「からたちの花」など、そして歌手も藤原義江や関屋敏子などオペラ界の大物を起用したね。でも、子供の歌手がでてきて、そちらに人気移っていったんだ。いわゆる童謡歌手の相次いでデビューだ。



コロムビアは「七つの子」の野口雨情、本居長世を起用して、娘のみどり三姉妹を専属にして「赤い靴」「青い目の人形」「十五夜お月」など出し、7年には佐々木すぐるが迎えられて、大川澄子と組んで「月の沙漠」などヒットを出し、ビクターは西条八十、中山晋平が平井英子と組み「アメフリ」「鞠と殿さま」「証城寺の狸囃子」「シャボン玉」「黄金虫」など出したんだ。そこには雨情もまじえてた。

ポリドールは、まず5年に清水かつら、弘田龍太郎が「雀の学校」を、大村主計と豊田義一が「花かげ」を、サトウ・ハチローと河村光陽で「うれしいひなまつり」。海沼実が「からすの赤ちゃん」。富原薫と草川信「汽車ぽっぽ」で、歌手は河村順子や永岡志津子などがいた。

キングは河村光陽が詞の武内俊子。そして娘の順子と組んで「かもめの水兵さん」「リンゴのひとりごと」「赤い帽子白い帽子」など、ほかに結城よしをと山口保治で「ないしょ話」、細川雄太郎と海沼実で「あの子はたあれ」などを出したんだ。河村順子は、一昨年亡くなったが、大学の教授にもなって生涯現役をつらぬいたね。童謡協会の会員にもなっていて、爺さんとしばしばお話をしたことがあった。

ほかにニットー、テイチクなどあった。テイチクでは細川、海沼のコンビで「ちんから峠」が出たが、それは戦争がはじまっての17年のことで、童謡もまた戦時国策宣伝に利用されたんだ。そんな中で明るい気持ちにさせてくれたのはサトウ・ハチロー、二木他喜雄の「めんこい仔馬」(映画の主題歌)。吉田テフ子、佐々木すぐる「お山の杉の子」があった。

「めんこい仔馬」は映画の主題歌で、高峰秀子が評判を呼んだんだが、爺も観に行ったので懐かしいよ。どちらも国民学校(今の小学校)のときも、学校で歌ったよ。あのころは新しい軍歌が出



ると校長が全員集合の声をかけて、みんなに歌わせたんだ。「月月火水木金金」「大東亜決戦の歌」「ラバウル航空隊」「小国民進軍歌」「勝ちぬく僕等少国民」などたくさんあったが、心に残るいい歌は「子を頌う」(ほめたたえる)だったね。こちらはラジオで覚えたね。

朝、学校につくと、間もなく警戒警報のサイレンが鳴る。やがて、サイレンの響きは空襲警報に変わる。すると、授業はとりやめになって、みんな家へ向かって駆け足だ。

防空頭巾とゲートルは手放せない。体は防空壕へ飛び込む態勢でいる。敵機が上空にやってきたときの緊張感。爆音の響に生きた心地はしなかった。

このころ戦時中といえれば忘れてならないのが、これらの歌をうたった川田正子の活躍だ。空襲が激しくなった19年から20年にかけて学童疎開がはじまり、東京には子供がいなかった頃、ラジオ(NHK)から子供の歌声が聞こえていた。東京に空襲のない日はあっても、川田正子の歌声の聞こえない日はないとまで言われていたんだね。爺など9時には床についたが、その時間でも、歌っていたことがあって憶えているよ。まだ東京は大丈夫なんだろうかと思ったね。あとで、ずっとたってから正子さんに聞いた話だけど、やっぱり空襲は怖かったと言っていた。



一昨年(2020年)の1月、お元気だったのに、急に亡くなられた。爺とは同じ歳だったんだ。それだけに惜しまれてならないよ。増上寺で告別式が行われ、爺は慰霊に向かってお線香をあげた。妹の孝子さんにお悔みを告げた。次回は戦後の童謡だ。爺の書棚に、川田正子著「童謡は心のふるさと」がある。実はこの題名は、爺の「心のふるさとを歌う会」からとったもの。信じられないだろうが、ほんとだよ。

- ※ 海沼実(みづぬみ)は、現在三代目が継いでいる。「音羽ゆりかご会」は健在。その活躍ぶりは素晴らしい。初代が昭和27年、川田孝子(たけこのけ)を連れて新潟市公会堂のステージに立った。爺が高校3年生の時。満員の盛況ではあったが、数日後、美空ひばりが新潟にやってきたときは、駅前に身動きができないほどファンが押し寄せた。新聞がそれを報じたとき、童謡の落日を身をもって感じた。
- ※ 童謡は、二十五年頃から、余りにも商業主義に傾斜していったのが災いして、飽きられてしまったのだ。
- ※ 小嶋くるみ(こじまくるみ)は、本名、鷲津名都江(すずなみともえ)。青山学院大米英学科卒。1986年目白学園女子短大英文科助教授に就任。「わらべ歌」「マザー・グース」を研究。

(つづく)

## (第十二話) 最終回

戦後、特に終戦直後は歌を求める国民の間に、童謡は流行歌と一緒にあって、盛んに歌われるようになったんだ。あの頃、新日本建設を掲げて、みんな希望に燃えていたんだね。

そうした中で、戦時中から活躍を続けていた川田正子と音羽ゆりかご会が、いち早く迎えられ、大道真弓、井口小夜子も加わった。音羽ゆりかご会などはあまりにもラジオに出過ぎて、東京放送児童合唱団との相互出演させたほどだ。

爺が国民学校5年生の20年夏、戦争は終わったんだが、12月にラジオで『外地引揚同胞激励の午後』が放送され、このとき川田正子が歌った「里の秋」(斎藤信夫・海沼実)はすぐ知られ歌われた。そして翌年の5月「赤ちゃんのお耳」が、戦後初のレコードとなって発売された。学校近くの文房具屋のおばさんが、かけてくれる蓄音機の歌声に、みんな耳を傾け嬉々として歌ったもんだが、平和になった嬉しさを心行くまで味わったものだったよ。そして、8月にはNHKの二元放送開始で「みかんの花咲く丘」が放送されるや、大ヒットになり、更に22年7月から連続放送劇「鐘の鳴る丘」で、「とんがり帽子」が出ると、またまたヒット、川田の名は全国に轟いた。

しかし、そのドラマの続くうち、「涙のお別れ大放送」をして突如引退した。彼女は将来を期して勉学の道に進んだ。卒業するとカムバックし、自ら「森の木児童合唱団」を起して、その後は生涯現役を貫いて、歌の道を全うしたのだ。引退はしたが、「鐘の鳴る丘」のドラマが終わるまでは、スタジオに通ったという。義理堅いというか、真面目だったね。



妹の孝子は、正子の引退少し前から歌っていたが、「ちんから峠」「お猿のかごや」で人気を高めていった。更に三女的美智子が出ると、川田三姉妹といわれるようになった。その頃、24年に美空ひばりが12歳で「悲しき口笛」を歌って華ばなしくデビューすると、この影響も手伝って、少女歌手が続々と登場して、一大豆スターブームを巻き起こしていったんだ。少女雑誌が相次いで出ると、これらの表紙やグラビアを賑やかに彩ったものだ。アイドルとは言いづらかったがね。爺は中学生だったよ。

そうした豆スターの中で、飛びぬけて記憶にとどまるのは、古賀さと子、伴久美子、田端典子、小嶋くるみ、近藤圭子、安田祥子、章子姉妹、松島トモ子の面々だ。加えて「ひばり児童合唱団」の活躍も大きかった。それからここで忘れてならないのは、松田トシ・安西愛子の二人だね。二人は24年8月からNHKラジオの「うたのおばさん」として、15年間生放送で歌い続けたんだが、爺には、まだ耳底に残っているよ。ここには新しい歌が生まれたんだが、作曲に携わったのは、芸大を出たばかりの新進



気鋭 芥川也寸志、団伊玖磨、黛敏郎の3人組。作詞ではサトウ・ハチロー、小林純一、まど・みちお、佐藤義美、阪田寛夫などだった。

更に、NHKは30年に「幼児の時間」など設け、子供の番組を強化していったのだが、歩調を合わせるかのように、作曲仲間が集まって「ろばの会」を結成した。よい詞によい曲をつけようということで、メンバーは磯辺淑、宇賀神光利、大中恩、中田一次、中田喜直の5人だった。勿論、歌のおばさんも歌ったし、更にはボニー・ジャックス、友竹正則、真理ヨシコ、中野慶子などの歌手が情熱を傾けて「小さい秋みつけた」「サッチャン」「いぬのおまわりさん」「ドロップスのうた」など名曲の数々を発表していったんだ。

「ろばの会」ができて、NHKは、「うたのおばさん」を通して、文字通りよい歌が生み出されていくと、豆スターたちの歌のブームは去って行ったんだ。爺が高校生になった時代。いわゆる童謡は、あまりにも商業主義が強まって大量生産化されたのが、わざわざいらしたんだね。踊りの振り付けが多くなり、振り付けのための童謡になってしま



中央左からサトウハチロー、中田喜直と共に日本テレビに出演 昭和48年

まい、飽きられてしまったんだね。儲け主義に陥ると碌なことはないよ。「ろばの会」はそうした反省の上にもたっていたんだ。そこで童謡でなく、「こどものうた」と言い方を変えたんだ。

30年以降はテレビ時代に移って行き、歌の世界は様変わりしていくが、サトウ・ハチローが日本童謡協会を設立すると、彼らもここに参加し、童謡の名のもとに中田は二代目になり、現在は湯山昭が三代目を継いで、いい歌づくりの活動を続けているんだ。湯山昭はNHKの「幼児の時間」などで活躍したね。平成5年4月に入会した爺は、この会のはしくれにいるってわけだ。その時の会長は中田喜直だったね。

- ※ NHK うたのおにいさん 初代 田中星児 二代 水木一郎 三代 たいらいさお ..
- NHK うたのおねえさん 初代 真理ヨシコ 二代 中野慶子 10代 小嶋くるみ 現21代 小野あつこ
- ※ 「黒猫のタンゴ」皆川おさむは、「ひばり児童合唱団」から出た。2015年からは母親が亡くなり、後を継いで指導者になった。
- ※ 日本童謡協会 1969年(昭和44年)結成。初代サトウ・ハチロー 二代目 中田喜直 三代目 湯山昭
- ※ 平成七年に爺は「安西愛子良歌保存会」に誘われ、入った。安田生命ホール、駒場エミナースと二回、ステージにたち、川田さんとも共演した。
- ※ 平成30年(2018)は童謡誕生百年に当る。それを記念して「童謡100年」プロジェクトが四年前に始まり、爺は顧問になった。そしてこの日をきして「日本童謡学会」として発足した。
- ※ 大正七年七月一日「赤い鳥」が創刊され、童謡協会ではこの日を「童謡の日」とした。

(完)